



令和元年度 特集展示

明治の郷土画家 内海吉堂

明治の郷土画家 内海吉堂展 展示資料リスト

※前期・後期にわけて展示 前期：10月24日(木)～11月10日(日)
後期：11月12日(火)～11月28日(木)

No.	資料名・数量	作者等	時代	素材	数量	所蔵	展示期間	備考
I 敦賀の絵師・内海三代								
I-1 元孝・元紀 ～内海家ゆかりの地・敦賀～								
1	李白・陶淵明大酔図	内海元孝	江戸時代	紙本着色	二曲一隻	個人	前	
2	画帖	内海元孝	寛政元年(1782)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	前/後	
3	画帖	内海元孝	寛政2(1783)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	前	
4	画帖	内海元孝	不詳	紙本墨画	一冊	八幡神社	後	
5	東方朔図	内海元孝	江戸時代	紙本着色	一幅	八幡神社	前	
6	紙漉図 (市指定文化財)	内海元孝	江戸時代	版画	一幅	八幡神社	後	市指定
7	西王母・寿老図	円山応挙	安永5(1766)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
8	猛虎図	内海元孝	江戸中期	紙本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
9	敦賀津図 (市指定文化財)	内海元紀	慶応元(1865)年	絹本着色	一幅	当館	前	市指定
10	敦賀十勝	内海元紀	江戸後期～明治	版画	十枚	当館	後	
11	縮図帖	内海元紀	不詳	紙本墨画	一冊	八幡神社	前	
12	画帖	内海元紀	天保9(1838)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	前	
13	画帖	内海元紀	天保15(1844)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	後	
14	樹陰煎茶図	岡本豊彦	江戸後期	絹本淡彩	一幅	当館	前/後	パネル展示
I-2 吉堂と敦賀								
15	画帖(真寫鳥虫)	内海吉堂	文久3(1863)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	前/後	
16	画帖(真寫帖)	内海吉堂	明治2(1869)年	紙本墨画	一冊	八幡神社	前/後	
17	大和田莊兵衛日記	大和田莊兵衛	明治8(1875)年	冊子	一冊	当館	前/後	
II 吉堂 ～南画に生きる～								
II-1 吉堂と師								
18	鬼峯遺稿	小菅鬼峯	大正3(1914)年	版本	四冊	西尾市岩瀬文庫	前/後	
19	柳汀飛蜚図	塩川文麟	江戸後期	絹本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
20	(中)瀑布図・(左)山莊閑居図・(右)月下溪流図	塩川文麟	江戸後期	絹本着色	三幅対	当館	前/後	パネル展示
21	(右)梅溪早行図・(左)松山晩前図	塩川文麟	慶応2(1866)年	絹本着色	対幅	当館	前/後	パネル展示
II-2 中国外遊から南画家へ								
22	老梅図屏風	内海吉堂	明治17(1884)年	紙本淡彩	二曲一隻	当館	後	
23	松樹観瀑図	内海吉堂	明治19(1886)年	絹本淡彩	一幅	当館	前	
24	澄潭鯉魚図	内海吉堂	明治19(1886)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
25	深潭鯉魚図	内海吉堂	明治41(1908)年	絹本着色	一幅	個人	前/後	
26	芙蓉白鷺図・桃華双鴨図	内海吉堂	明治23(1890)年	絹本着色	対幅	当館	後	
27	京都皇宮及各離宮拝観ノ儀付願	内海吉堂	明治24(1891)年	紙本墨書	四枚	当館	前/後	
28	松竹鶴図屏風	内海吉堂	明治26(1893)年	紙本着色	六曲一双	当館	前/後	パネル展示
II-3 南画批判の中で								
29	新古美術品展覧会書画出品奨励委員囑託状	京都美術協会	明治30(1897)年	紙本墨書	一枚	当館	前/後	
30	棧道高秋図	内海吉堂	明治30(1897)年	絹本着色	一幅	福井県立美術館	前/後	パネル展示
31	若松双鶴図	内海吉堂	明治31(1898)年	絹本着色	一幅	当館	後	
32	牡丹孔雀図	内海吉堂	明治34(1901)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
33	名花十友図	内海吉堂	明治34(1901)年	絹本着色	一幅	当館	後	
34	全国絵画共進会審査員依頼状	全国絵画共進会	明治36(1903)年	紙本墨書	一枚	当館	前/後	
35	巫峡牽舟図	内海吉堂	明治36(1903)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
36	巴陽峡図	内海吉堂	明治36(1903)年	絹本着色	一幅	当館	後	
37	天台石梁図	内海吉堂	明治36(1903)年	絹本着色	一幅	個人	前	
38	僊苑春酣図・禪林秋老図	内海吉堂	明治43(1910)年	絹本着色	対幅	当館	前	
39	秋林掃樵図	内海吉堂	明治44(1911)年	絹本着色	一幅	当館	前	
40	蓮塘曉露図	内海吉堂	明治44(1911)年	絹本着色	一幅	本勝寺	後	
41	寒月老梅図	内海吉堂	明治・大正	絹本墨画	一幅	当館	前	
II-4 大正期以降								
42	唐美人図	内海吉堂	大正元(1912)年	絹本着色	一幅	当館	前	
43	桑林少婦図	内海吉堂	大正元(1912)年	絹本着色	一幅	当館	後	
44	蘭亭曲水図	内海吉堂	大正2(1913)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
45	兒童花園採榴子図	内海吉堂	大正3(1914)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
46	綵鳳來儀図	内海吉堂	大正3(1914)年	絹本着色	一幅	当館	前	
47	寒鴉枯木図	内海吉堂	大正5(1916)年	紙本墨画	一幅	当館	後	
48	松潤茗図	内海吉堂	明治・大正	絹本着色	一幅	当館	前	
49	春帆細雨図・秋霽登高図屏風	内海吉堂	大正10(1921)年	紙本金地着色	六曲一双	当館	前/後	
50	吉堂遺稿	内海吉堂	大正14(1925)年	版本	一冊	八幡神社	前/後	
51	花卉図	内海吉堂	大正11(1922)年	絹本着色	一巻	当館	前/後	
52	山水・花鳥図画冊	内海吉堂	大正10(1921)年	絹本着色	一冊	当館	前/後	
III 吉堂周辺の画家								
53	僊家空外図	山田介堂	大正8(1919)年	絹本着色	一幅	当館	前/後	
54	溪山秋晩図	松尾晚翠	明治・大正	絹本着色	一幅	当館	前/後	
55	敗荷鴛鴦図	幸野樸嶺	明治	絹本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
56	不老長寿図	松尾晚翠	大正15(1926)年	絹本着色	一額	当館	前/後	
57	柳塘春晴図	河村虹外	明治・大正	絹本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
58	月夜彈琴図	河村虹外	明治・大正	絹本着色	一幅	当館	前/後	パネル展示
59	色紙	松尾晚翠	明治・大正	紙本着色	一枚	当館	前/後	
60	色紙	白井清泉	大正10(1921)年	紙本着色	一枚	当館	前/後	
61	丹青小観	白井清泉	大正10(1921)年	版本	一冊	当館	前/後	
62	芭蕉図茶碗	内海吉堂	明治35(1902)年	陶磁器	一口	当館	前/後	
63	吉堂肖像(写真)		明治41(1908)年・不詳	写真	二枚	当館	前/後	

主な参考文献
『特別展 円山派と内海三代絵画展』敦賀市立博物館 1984年/『南画ってなんだ？！近代の南画―日本のこころと美』兵庫県立美術館 2008年/『文人画の鑑賞基礎知識』佐々木丞平・佐々木正子 至文堂 1998年/『山水から風景へ 京都日本画の流れ 文麟・樸嶺・栖鳳』京都市美術館・京都新聞社 1995年/『京都近代美術工芸のネットワーク』並木誠二・青木美保子 思文閣出版 2017年/『名家歴訪録 上編』黒田譲 1899年/『気比史学』気比史学会 1980年/『敦賀市史』敦賀市役所 1988年/『敦賀教育史』敦賀市教育委員会 2002年/『敦賀郷土史談』山本元 1935年(1976年海光堂書店復刻)
謝辞(順不同・敬称略)

この展示を開催するにあたり、貴重な所蔵作品を貸与くださり、また、情報のご提供などご協力いただきました方々に厚く御礼を申し上げます。
西尾市岩瀬文庫、八幡神社(敦賀郷土博物館)、本勝寺、古美術西川、福井県立美術館
青木眞美、石井惣平、内海良和、椎野見史、西川英敏、西谷慶一、桃井泰人、森光彦、吉川俊夫
2019年10月24日 敦賀市立博物館 発行
2025年12月4日改訂

皆さん、内海吉堂という人物をご存知でしょうか。地元以外の方にはあまり聞き馴染みのない名前かもしれませんが。内海吉堂は、明治・大正期に京都で活躍した、敦賀出身の南画家です。父親の元紀（一八二一―一八八七）、祖父の元孝（一七七二―一八三五）も絵師として活躍し、敦賀では「内海三代」と称され親しまれています。しかし、吉堂の活動の詳細は未だにわかっていないところも多く、同時代の画家たちの中でも取り上げられにくい画家ではないかと思えます。吉堂は敦賀出身ですが、幼い頃に滋賀に移り、医者的小菅兎峯に漢学を学びます。また、絵は円山四条派の塩川文麟（一八〇八―一八七七）に師事します。吉堂は、南画界が厳しい局面にあった明治期に、南画家として活動しました。開国以来世界と対峙し、新たな日本画の表現を求めていた美術界で、南画は古いものとして批判を浴びることになりました。しかし、吉堂はその状況下であっても、中国文化を学び、南画の世界を堅実に表現し続けました。吉堂の作品は、四条派の写生と抒情的な部分を活かしつつ、明清時代の中国絵画の影響を受けた清雅な画風が特徴です。

当館では、敦賀ゆかりの画家を中心に、近世・近代にかけての京都画壇の作品を所蔵しております。この度の展示では、当館所蔵作品を中心に、内海吉堂関連の資料をご紹介します。

この展示を通して南画家として活躍した内海吉堂の画業を顧み、少しでも多くの方に吉堂の作品の魅力を感じていただければ幸いです。



吉堂基本DATA	
内海吉堂	
通称：鹿六	名：復 号：吉堂 字：休卿
父：元紀	母：むめ 祖父：元孝 妻：鉸千代 息子3人・娘2人
嘉永3（1850）年生―大正12（1923）年10月9日没 ※生没年は吉堂墓碑（高台寺墓地）にもとづく。	
師：小菅兎峯、塩川文麟	
弟子：松尾晩翠、白井清泉（長女・孝と結婚）、菊池契月、町田曲江	

I 敦賀の絵師・内海三代

内海家は、家系図によると元は府中武生の士族で、大坂の陣に出陣したといわれています。内海元孝の父、次郎座衛門は、絵を得意とし、天明五（一七八五）年、幕府側が敦賀へ琵琶湖間の運河計画の為に敦賀を検分した際、依頼されて絵図を作成しています。息子の元孝もまた、文化三（一八〇六）年、伊能忠敬が日本地図作製で敦賀を測量に訪れた際、敦賀郡の地図の清書をしました。元孝は、円山応挙（一七三三―一七九五）に入門し、応挙没後は長沢芦雪（一七五四―一七九九）に学びました。円山派の画風を守った優れた作品が多く、市内の杜寺には元孝の筆による絵馬等も残されています。

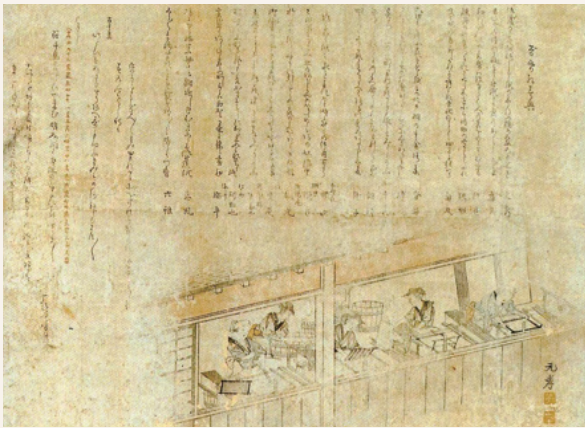
元紀は、敦賀旭町柴田善兵衛の長男として生まれますが、内海家の婿養子となり、元孝の後を継ぎました。絵は、四条派の岡本豊彦（一七七三―一八四五）に学びました。彼が描いた「敦賀津園」や「敦賀十勝」は、当時の敦賀を知ることができる、郷土の歴史資料としても貴重な作品です。

また、市内には元孝と元紀の画帖が残されています。元孝の画帖からは、応挙や芦雪の絵を思わせ、円山派の画風をよく勉強していたことがわかります。元紀は、祭りの衣装や道具、身の回りの草花などを細かく記録し、熱心に写生を行っていたことが知られます。

◇ I-1 元孝・元紀 ～内海家ゆかりの地・敦賀～



内海元紀筆「敦賀津園」 慶応元（1865）年



内海元孝筆「紙漉園」 江戸時代（八幡神社蔵）

◇ I-2 吉堂と敦賀

元紀の息子として生まれた吉堂は、幼い頃に滋賀へと移り、後には京都を中心に活動します。そのため敦賀の地で過ごした時間はさほど長くなかったかと思われそうですが、それでも彼の中に敦賀は故郷として存在していました。吉堂が敦賀の風景や寺社仏閣を写生した画帖が残っています。また、『大和田莊兵衛日記』（明治八（一八七五）年）には、敦賀の文化人が集って、書画の鑑賞や揮毫をしたり、骨董品の入札や囲碁将棋をしたりする雅会（一方会、後に同楽社）の参加者に吉堂の名が記されており、彼が敦賀の文化人と関係を持っていたことがわかります。また、鈴木松年（一八四八―一九一八）が敦賀を訪れた際、一方会の会員は松年に弟子入りして絵を学んだといい、当時の吉堂も松年と交流があったのではないかと思われる。

◇ II-1 吉堂と師

吉堂は幼い頃に滋賀県へ移り、犬上郡久徳村（現多賀町久徳）の医者小菅兎峯のもとに身を寄せて漢学を学びました。兎峯との関係はこれまで詳細にはわかっていませんでしたが、兎峯の遺稿集『兎峯遺稿』に、吉堂は編集で携わり、扉絵には兎峯の肖像を描いています。本文の兎峯の詩文には、吉堂との師弟関係が垣間見えるものがあります。また、吉堂にとって兎峯の教育は彼の思想に大きく影響を与えました。兎峯は吉堂に「絵を学びたければまずは品性を養い、品性を養いたければまずは読書をするべきである。」と、絵を学ぶためにはまず学問を修めることと説いています（『吉堂遺稿』より）。また、吉堂の中国外遊を勧めたのも師の兎峯でした。

絵の師であつた塩川文麟は、四条派の岡本豊彦の門下で、吉堂の父元紀とは同門であり、その関係で吉堂を弟子として迎え入れたと考えられます。吉堂は、師の文麟について以下のように語っています。

塩川文麟も親父と同門で、至て懇意でありましたから、息子を此地へよこしたらよからふとのことで、未だ私の子供上りで、十二の時から塩川の家へ参りましたが。（中略）師匠文麟は無論四条派であります、精神はやはり支那で、晩年になって無村を学びましたが、もともと支那好ですから、西園雅集とか、飲中八仙のやうなものになると、芦雪や南岳と違ふて、其時代と人物の風采など熟慮して描くという方で。…支那の樓閣人物は、殊によく描きました。（『名家歴訪録』より）

四条派を学んだ吉堂ですが、父親の元紀は南画に影響を受けており、また師の塩川文麟も中国絵画を志向していたことから、吉堂が南画へと傾倒していくのは必然だったといえるでしょう。



塩川文麟筆「梅溪早行図・松山晩前図」 慶応2（1866）年

寓内海吉堂宅
留滞暮春新夏初。
一庭綠樹滴階除。
倦時看畫吟時酒。
起臥君廬似我廬。
今尋菟道昨嵯峨。
詩酒優游吟且哦。
出有乘車食魚肉。
何爲長缺發歸歌。

吉堂の家で過ごした時の詩

送内海吉堂游清國和留別詩韻
一尊別酒舉杯輕。
醉唱驅歌壯此行。
燕雀安知鴻鵠志。
煙波空惜鷺鷥情。
飄然渡海入禹域。
去矣負花離洛城。
魚雁時須寄消息。
老懷日夕待歸程。

中国へと渡る吉堂との別れを詠った詩

中国外遊から南画家へ

吉堂は、明治一〇（一八七七）年、師の文麟の死後間もなく中国へ渡ります。この頃の日本は情勢が不安定で、同年には西南戦争が勃発しています。そんな中、吉堂は東本願寺の上海別院に寄宿する許しを得て、九州へ向かう東本願寺の門主と、それに随行していた幸野樸嶺と共に船で長崎へ寄り、そこから上海へと渡りました。上海に三年ほど滞在し、蘇州・杭州にも三年滞在しました。中国では特に師は定めず、いろいろな画家墨客と交流して、そこで絵を臨画し、生活しながら当地の言語や文化芸術を学びました。そうして六年間の中国遊学を経て帰国した吉堂は、南画家として本格的に活動します。幸野樸嶺らによって発起された京都青年絵画研究会の審査員を務めるなど、富岡鉄斎ら当時の京都画壇の画家たちと活動を共にし、切磋琢磨して画技の向上に努めました。この頃の吉堂は、中国明清時代を思わせる山水画や花鳥画を描きつつも、円山・四条派の技法や画風をベースとした作品が見られます。

明治期の日本は、政府の殖産興業の方針のもと、輸出振興が図られました。特に、輸出品目には染織や陶芸が重視されました。吉堂もその時流の中で、高島屋主宰の帛紗図案の懸賞会において審査員を務めたり、また、海外輸出用陶器を大量生産することを目的に創設された京都陶器会社の工業課長を務めたりしています。

南画家として活動していた吉堂ですが、江戸時代に展開し隆盛した南画は、漢学の素養をもつ幕末志士たちに好まれ、明治に入っても依然その人気が続いていました。しかし、明治一五（一八八二）年の龍池会の講演で、フェノロサが形骸化し精神性に欠けていた当時の南画を批判したことを契機に、「つくね芋山水」と揶揄され厳しい局面を迎えることになりました。それは、明治二二（一八八九）年に開校した東京美術学校において南画が除外されたほどで、南画は保守派として新時代の潮流から外されるかたちとなってしまうしました。そのような厳しい中でも、田能村直入や富岡鉄斎を中心に京都の南画家たちは団結し、日本南画協会を結成します。吉堂もその協会の評議員を務め、活動に携わりました。

南画批判の中で

南画批判が起こつて以降、旧派として、岡倉天心や横山大観らをはじめとした新派と対立していた南画家たちは、明治四〇（一九〇七）年の文部省美術展覧会（文展）が開催されたときも、日本美術協会、日本南宗画会、日本画会等の諸団体で正派同志会を結成し、文展不出品を決議しました。南画は古画の域を出ていないと非難される中で、南画家たちは自然に立ち返り、想像や模倣ではなく実景を描いた風景画（真景図）をより現実的に捉えなおし、写生を重視したりアリティーのある表現を試みました。

明治三〇年代の吉堂は、岡倉天心が主宰していた日本絵画協会の絵画共進会に作品を出品し、第三回絵画共進会では「棧道高秋図」が一等褒状を受賞します。当時の南画が美術界において批判の対象であったというものの、根強い支持と評価を得ていたことが知られます。また、明治三五（一九〇二）年に、吉堂は二度目の中国遊学をおこないました。その翌年に制作した「巫峡牽舟図」「巴陽峡図」「天台石梁図」では、実際に見てきた中国の風景をもとに、雄大な山水を描いています。一貫して南画家として制作活動を続けた吉堂の謹厳な姿勢がうかがえます。また、三〇年代から大正初期頃までの吉堂の落款にはおもに「吉堂逸史復」が見られ、逸史時代と称されます。



内海吉堂筆「棧道高秋図」 明治30(1897)年 (福井県立美術館蔵) 第3回(秋季)絵画共進会にて一等褒状受賞



内海吉堂筆「名花十友図」 明治34(1901)年



内海吉堂筆「牡丹孔雀図」 明治34(1901)年



内海吉堂筆「芙蓉白鷺図・桃華双鴨図」 明治23(1890)年



内海吉堂筆「老梅図屏風」 明治17(1884)年



内海吉堂筆「澄潭鯉魚図」 明治19(1886)年

※生没年は吉堂墓碑にもとづく。
※赤字は吉堂の動向。「」内は作品名

内海吉堂年表

和暦／西暦	満年齢	事 項
嘉永3年 (1850)	0	吉堂出生 幼少より湖東の医師・小菅兎峯に漢学を学ぶ
嘉永6年 (1853)	3	米籬隊、ペリー提督浦賀に入港
文久元年 (1861)	11	塩川文麟に絵を学ぶ
文久3年 (1863)	13	「真寫魚鳥虫」
明治1年 (1868)	18	この頃、如雲社設立（塩川文麟）
明治2年 (1869)	19	「真寫帖」
明治4年 (1871)	21	日本初の博覧会が京都（西本願寺）で開催
明治5年 (1872)	22	第1回京都博覧会
明治6年 (1873)	23	ウィーン万博に日本美術を出品
明治7年 (1875)	25	教員で一方会に参加し、大和田莊兵衛ら教員の文化人と交流する
明治9年 (1876)	26	5月25日・中国遊学。上海に渡る（6年間） 西南戦争 5月11日・塩川文麟没（享年70歳） 8月・第1回内国勸業博覧会
明治11年 (1878)	28	中国遊学 5月・パリ万博 幸野樸嶺ら京都府知事に「画学校設立建議書」提出
明治12年 (1879)	29	中国遊学
明治13年 (1880)	30	中国遊学 京都府画学校開校（摂理・田能村直入）
明治14年 (1881)	31	中国遊学 第2回内国勸業博覧会 高島屋、内国勸業博覧会に出品 幸野樸嶺、京都府画学校辞職、私塾を開業
明治15年 (1882)	32	帰国 5月・龍池会でフェノロサが南画を批判（美術真説） 10月・農商務省主催第1回内国絵画共進会開催 洋画の出陳拒否 南画を「つくね芋山水」と酷評
明治16年 (1883)	33	工部美術学校廃止
明治17年 (1884)	34	「老梅図屏風」 2月・フェノロサ、鑑画会組織 4月・第2回内国絵画共進会
明治18年 (1885)	35	9月・鑑画会第1回大会 幸野樸嶺、竹内栖鳳、東本願寺殿如上人に随行して北陸方面旅行
明治19年 (1886)	36	富岡鉄斎らと共に京都青年絵画研究会の審査員を務める 「松檉観瀑図」「澄潭鯉魚図」 幸野樸嶺ら、京都青年絵画研究会（作品競技会）開催
明治20年 (1887)	37	9月12日・父元紀没（享年74歳） 京都陶器会社の工業課長を務める 龍池会改め日本美術協会が発足
明治21年 (1888)	38	京都府画学校に応用図案科が設置 高島屋、バルセロナ万博に出品
明治22年 (1889)	39	2月・大日本帝国憲法発布 10月・『國華』創刊 除外 東京美術学校開校↓南画に勤務 竹内栖鳳が高島屋意匠部に勤務
明治23年 (1890)	40	「芙蓉白鷺図・桃華双鴨図」 1月9日・京都美術協会設立（久保田米遷、幸野樸嶺） 4月・第3回内国勸業博覧会開催 帝室技芸員制設置
明治24年 (1891)	41	高島屋の懸賞会の審査員を務める 京都専門画工同盟有志者総代として京都府知事に京都皇宮と各離宮の入場について願書を提出 田能村直入が自宅で南宗画学校を開校 高島屋が帛紗図案の懸賞会を行なう（1白選会） 京都陶器会社工場停止 竹内栖鳳ら京都青年作家懇親倶楽部結成
明治25年 (1892)	42	大日本実業協会設立
明治26年 (1893)	43	「松竹鶴図屏風」 5月・シカゴ万博 高島屋飯田新七が貿易部を独立させ、直接輸出を目的に飯田新七東店（貿易店）を開設
明治27年 (1894)	44	日清戦争 京都市美術学校が京都市美術工芸学校と改称
明治28年 (1895)	45	第4回内国勸業博覧会（京都）に「富貴寿考牡丹鶴受天百禄栢樹鹿」出品 東本願寺障壁画制作

大正期以降

大正元（一九一二）年に
行われた第六回文展では、
日本画は一科（旧派）と二
科（新派）にわけられまし
た。吉堂は一科で「船過孟
浪梯図」を出品し、褒状を
受けました。翌年の第七回
文展にも「江南春霞屏風」
を出品しています。落款は
大正元年頃から没年までお
もに「吉堂居士」または「吉
堂居士復」を使用していま
す（居士時代）。晩年に制
作した「春帆細雨図・秋霽
登高図屏風」は、吉堂の胸
中山水（心の中にある理想
の山水）を表現したもので、
中国に憧憬し、南画家とし
て理想を追求し続けた吉堂
の集大成ともいえるでしょ
う。

吉堂は大正一二（一九二
三）年十月九日に京都高倉
通りの自宅にて死去しまし
た。享年七四で、最後まで
誠実に南画の道を歩み続け
た人生でした。



内海吉堂筆「唐美人図」 大正元（1912）年



内海吉堂筆「春帆細雨図・秋霽登高図屏風」 大正10（1921）年



内海吉堂筆「寒鷲枯木図」
大正5（1916）年



内海吉堂筆「児童花園採櫛子図」
大正3（1914）年

吉堂の人物像
吉堂がどうい人物だったのか、はっきりとはわかっておりませ
んが、『名家歴訪録』には著者の黒田譲による吉堂の印象が記述さ
れています。吉堂は、幕末から当時の明治30年代にかけての日本
の美術界について、淀みなくすらすらとその変遷を語っており、著
者も“平日より深く斯道に留意せると、且つ理會咀嚼の力の、汎々
たる時流に抜く一頭地なるに非ざれば、決してこゝに至らざるべし。”
と吉堂の教養の深さに感心しています。また、“方面大耳、重厚の
氣眉宇に露はれ、言語は含み聲にして且つ捷し。画論、其他の書に
於て、頗る造詣する處ありといふ。”と記しており、吉堂の姿やそ
の話し方（こもった声で早口だったようです）がイメージできます。
また、『吉堂遺稿』の跋文には“性温厚”と記されています。



内海吉堂筆「櫻苑春酣図・禪林秋老図」 明治43（1910）年



内海吉堂筆「若松双鶴図」 明治31（1898）年



内海吉堂筆「天台石梁図」 明治36（1903）年
（個人蔵）

◎南画とは？文人画や南宗画とのちがいは？

大ざっぱに言えば、だいたい同じと考えていただいて良いでしょう。もともと同
義ではありませんでしたが、日本独自の解釈へと変わっていきました。

南画は、中国の絵画様式のひとつである南宗画を源流にして江戸時代におこつ
た画派です。大まかに言うと、やわらかい線を重ねた描法の山水様式（渲染法・
皴法）を南宗画と呼びました。一方で、ゴツゴツとした鋭い線で表現された山水
画は北宗画と呼ばれ、中国の董其昌がこの概念を論じ、北宗画よりも南宗画が優
れているとしました。日本の南画は、中国の南宗画に由来し、南宗画を略した名称
の「南画」が使われるようになりました。

文人画は、絵を職業としない立場の人が描いた絵のことを指します。文人は唐代
に科擧の制度の確立とともに生まれた士大夫という官僚や、俗世間から隠遁した知
識人のことです。高い教養を持ち、知的修練のひとつとして絵画制作を行ないまし
た。よって文人画は本来、絵画様式による区別とは違い、知識人が描いた気品のあ
る絵画のことを指しているのです。しかし、次第に文人画が南宗画の様式を好んで
用いるようになったことから、文人画と南宗画が同じものとして捉えられるようにな
っていきました。

日本では南画を指して文人画という言葉を用います。中国の文人の生き方に憧れ
を持ち、そこに近づこうと教養を磨く人々が多くいましたが、日本には本来の意味
での文人はおらず、様式も南宗画にこだわることもなく北宗画や西洋画など
様々な要素を取り入れて独自に展開していったため、一口に南画といってもその考
え方は幅広いものです。

複雑ですが、彼らが特に大切にしたのは、「気韻生動」や「写意」でした。描か
れた絵の中に生き生きとした生命感が宿っているか（気韻生動）、自らの心象世界
を描き表せているか（写意）というものです。南画（文人画）は、他の絵画流派の
ような専門的な技法や教育を経て身に着けるのではなく、自身の知識を深め、そ
して自ら楽しむ（自娛）こと、その精神性を重視したのです。



内海吉堂筆「巫峽牽舟図」
明治36（1903）年



内海吉堂筆「蓮塘曉露図」 明治44（1911）年
（本勝寺蔵）

和暦／西暦	事	項
明治28年 （1895）	45	日清戦争 如雲社↓後素協会（竹内 栖鳳ら）／京都で第1回 日本青年絵画共進会開催 第4回内閣勸業博にて黒 田清輝「裸体青年」展 幸野橫濱設（享年52歳）
明治29年 （1896）	46	富岡鉄斎らと共に日本南 画協会の評議員を務める ／日本絵画協会第1回絵 画共進会に「青貫老筆」 （等装束）出品 2月・日本青年絵画協会 ↓日本絵画協会／12月・ 日本南画協会創立（田能 村直入・谷口露山・富岡 鉄斎ら） 京都市陶磁器試験所設立 7月・東京美術学校洋画 科を新設
明治30年 （1897）	47	日本絵画協会第2回（春 季）絵画共進会にて「長 春群鶴」（等装束）、 武春群鶴」（等装束）、 武陵松堂」出品／第3回 （秋季）絵画共進会にて 「棧道高秋図」が一等褒 状を受賞／2月27日（第 3回新古今美術展覧会） 京都美術協会の主催、書画 出品奨励委員に嘱託され る6月22日「名家歴訪録」 取材 3月・日本南画会を結成 （東京・菅原白龍ら）
明治31年 （1898）	48	第5回日本絵画共進会 「芭蕉と鶴」出品 「若松双鶴図」出品 3月・岡倉天心、東京美 術学校校長を退く（田能 村天心）日本美術院を創設 （岡倉天心）日本絵画協 会と連合して共進会を開 催。9月・大阪南宗画会が結 成。
明治32年 （1899）	49	京都陶器会社解散
明治33年 （1900）	50	第5回バリエーブル 「松風喜瀝」出品 第11回日本絵画共進会 「牡丹」出品 「牡丹孔雀図」名花十友 関西美術会設立 「芭蕉図茶碗」
明治34年 （1901）	51	「天台山石梁図」
明治35年 （1902）	52	日露戦争 堀川文麟25回忌 帰国 5月17日・全国絵画共進 会（後素協会主催）の審 査員に委嘱 「巫杖牽舟図」「巴陽峽 図」「天台石梁図」
明治36年 （1903）	53	日露戦争 日本南画会と分裂して日 本南宗画会を結成（松林 桂月ら）／日本美術院 五浦に移転
明治37年 （1904）	54	日露戦争 日本南画会と分裂して日 本南宗画会を結成（松林 桂月ら）／日本美術院 五浦に移転
明治38年 （1905）	55	日露戦争 日本南画会と分裂して日 本南宗画会を結成（松林 桂月ら）／日本美術院 五浦に移転
明治39年 （1906）	56	日露戦争 日本南画会と分裂して日 本南宗画会を結成（松林 桂月ら）／日本美術院 五浦に移転
明治40年 （1907）	57	文部省美術展覧会（文展） 開催。日本美術協会、日 本南画会、日本南宗画会 日本画会など正派同志会 を結成、文展不出品を決 議。 1月・田能村直入没 「深潭鯉魚図」 9月・フェノロサ、ロン ドンで客死
明治41年 （1908）	58	「観音図」 京都市立絵画専門学校創 立
明治42年 （1909）	59	「櫻苑春韻図・渾林秋老 図」 第4回文展、京都にて展 観。
明治43年 （1910）	60	「秋林婦稚図」「蓮塘曉露 図」出品 第6回文展、船越孟浪梯 「書美人図」「桑林少婦図」 出品 「書美人図」「桑林少婦図」 出品 「書美人図」「桑林少婦図」 出品
明治44年 （1911）	61	「秋林婦稚図」「蓮塘曉露 図」出品 第6回文展、船越孟浪梯 「書美人図」「桑林少婦図」 出品 「書美人図」「桑林少婦図」 出品 「書美人図」「桑林少婦図」 出品
明治45年 ／大正元年 （1912）	62	文展と第2科（新派）（旧 派）